

新潟市教育相談  
センターだより

も え ぎ

第 106 号  
2020年1月8日  
新潟市教育相談センター  
新潟市中央区西大畑町458番地1  
TEL (025) 222-8600 (代表)  
FAX (025) 222-8303  
E-mail:sodan.ed@city.niigata.lg.jp



## 相談者に寄り添った 教育相談を進める

所長補佐 小林 武

行動観察を専門とする研究者の方の本を読んでいたところ、営業についての行動観察結果から得られた「優秀な営業マンと普通の営業マンの違い」に目が留まりました。私ども教育相談に携わる者の心構えと相通ずる要件が挙げられていたからです。

要件は下記のとおりです。

- ①優秀な営業マンは、お客さんとのファーストコンタクトを非常に大事にしている。
- ②優秀な営業マンは、自分よりお客さんが話す時間が長い。  
(特に優秀な営業マンは、自分が話すのは最小限で、80%はお客さんが話す。)
- ③優秀な営業マンは、お客さんをよく観察をして、個別のお客さんのニーズに合う提案をする。
- ④優秀な営業マンは、お客さんに何か必ず親切なことをする。

『ビジネスマンのための「行動観察」入門』(2011)  
松波晴人 著 講談社現代新書

私は、優秀な営業マンは上手に話す、売り込むというイメージをもっていました。どうも違うようです。

確かに家電量販店に行った時に販売員の方が独りよがりに商品説明をされると、いくら商品知識が豊

かでも気持ちが引け、その場を離れたくなってしまいます。一方、笑顔で「何かお探しですか」などと言いながらさりげなくそばに来て、「今、ご覧になっている機種は画質がきれいですよね。特にこだわられていることはありますか」などとこちらの様子や返答を伺いながら、無理強いすることなく対応されると心地よく感じられ、会話も弾みます。

また、相談しやすいと感じられる販売員の方は迷っていると気付けば悩んでいることを聞き出し分かりやすく違いを説明したり、熟考していると思えば名刺を渡してその場を離れたります。

教育相談も相談者の方にこの人なら話をしてもいいと思っていただけないと相談が始まりません。また、教育相談は後者の販売員のように相談者の方との会話や様子などからその方のニーズを探り、その時々のおもいや気持ちを受け止めながら丁寧に、的確に対応することで相談者の悩みや困りごと、状況などについての理解を深めていくことができます。そして、最終的には相談者の方自身、お客さん自身が自己決定することやその過程が大切であることも共通点だと思いました。

私ども教育相談センターは、年間、のべ1万5千件近くの教育相談を行っています。来所される相談者の方々の悩みごとや困りごとは様々ですが、優秀な営業マンの要件のように相談者一人一人に寄り添った教育相談を進め、皆様のお役に立ちたいと考えています。皆様から一層信頼され、安心して利用していただけるように職員一同努めてまいります。

## 令和元年度 作品展のお知らせ

日 時：令和2年1月31日(金)  
会 場：新潟市教育相談センター  
作品展示：午前10時～午後1時45分  
・陶芸作品 ・小物入れ ・うちわ  
・書道 ・モザイクアート など  
音楽発表：午前11時～午前11時20分  
物品販売：午前11時35分～午後1時45分  
試 食 会：午前11時35分～午後1時45分

～作品展に、  
ぜひおいでください!～



土偶 (陶芸作品)



リース

令和元年度 教育相談研究会

令和元年11月20日 (水)

〈研究主題〉「今、求められている子どもへの支援」～「児童生徒理解・教育支援シート」でつなぐ連携のあり方～

※令和元年度教育相談研究会を、11月20日(水)に当センターにおいて開催し、多くの教職員や関係機関職員の方々に参加いただきました※

〈第1部・基調講演〉

連携のための仕組みを作る

新潟大学大学院 准教授 田中 恒彦 先生



平成29年度から「児童生徒理解・教育支援シート(以下、教育支援シート)」の活用をテーマに新潟市教育相談センターが行ってきた研究事業もはや3年目を迎える。今年「連携」をテーマとして研究を進めてきた。本年の基調講演では不登校児童・生徒の支援における連携について、事例検討会議における多職種間連携を念頭に検討を行った。

連携の場としての事例検討会

先にも述べたように子どもの支援には様々な関係機関が関わることがある。困難事例であればあるほど、関わる機関も多くなる傾向にある。関係者が一同に介して行われる事例検討会は有意義な場として働くこともあればそうでないときもある。専門多職種による連携支援が上手くいかない要因の一つに、参加者が自身の専門性に固執してしまうことがある。このような状態はmultidisciplinaryと呼ばれ、各参加者が自信の専門性を主張し、別々の見立てに基づいた独自の支援が行われることとなり情報の共有や一貫した支援が行われにくい。それと比較して、それぞれの専門職が共通の目的を設定した上で、共有した情報をもとに一貫性のある支援を行うようになる状態はtransdisciplinaryと呼ばれる。

transdisciplinaryなケース会議になるために

連携がスムーズに行われている時は、専門家はクライアントが向かうべき目標やゴールを共有できていることが多い。そこでは、自身の専門性は支援を行うための方法・道具であり、目的に合わせて運用されるものとなる。そのような会議では参加者の間で対話が行われることとなり、専門的な境界がぼやけ、個々のメンバーの責任と役割が横断的に共有されることとなる。このようなケース会議を行うためには、参加者が安心して議論ができる場を成立させるファシリテーションのスキルが重要になる。

さいごに

よりよい連携は目的の共有から始まる。不登校支援を行う者はぜひ、ファシリテーションスキルを高め、教育支援シートを中央に据えて多職種連携を行ってほしい。

教育支援シートの目的

教育支援シートは①不登校児童生徒一人一人の状況を適切に把握する②当該児童生徒の置かれた状況を関係機関で情報共有する③組織的・計画的に支援を行うことを目的に(文部科学省, 2016)作成される。つまり、教育支援シートは児童生徒を支援する者の中で共有することが前提として作られているものであり、学校内だけでなく保護者や教育支援センター、児童相談所などの関係機関、また小学校、中学校、高等学校など学校をまたいで利用されることが想定されている。教育支援シートは基本となるフォーマットが試案として示されているものの、この試案は共有すべき必要最低限の情報が盛り込まれているものとして、各学校において記載項目を改良して使用することが推奨されている。子どもを支援する際には子どもを取り巻く関係者が共通理解をもっていることが重要である。教育支援シートはそのための重要なツールとして作成されることとなる。

〈ポスター発表〉

北区、秋葉区、江南区、南区、西蒲区の各相談室の活動を紹介しました。



〈第2部・教育相談センターの実践発表〉

不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)  
令和元年10月25日 元文科初第698号

1 不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方

(1)支援の視点  
不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること。


児童生徒理解・教育支援シートの活用  
＜平成29年度＞子どもが動く「見立て」のあり方  
＜平成30年度＞PDCAサイクルで継続的支援を考える

3 教育委員会の取組の充実  
(3)教育支援センターの整備充実及び活用

2. 教育支援センターを中核とした支援ネットワークの整備  
…また、教育支援センター等が関係機関や民間施設等と連携し、不登校児童生徒やその保護者を支援するネットワークを整備することが必要であること。

＜本年度＞「児童生徒理解・教育支援シート」でつなぐ連携のあり方  
本人との関係図や本人の支援のための連携図を支援シートに入れてよりよい本人への支援に努めています。

相談部が、初回面接でお話いただいたことを、「教育支援シート」に支援を継続する上での基本的な情報を記入したり、本人を中心とした関係図や連携図を作成したりしています。



→ 関係図や連携図を活用している教育相談と適応指導教室の実践について発表し、参加者の皆様には日頃の連携についてグループでお話いただきました。

〈第1分科会・教育相談〉

アドバイザー 新潟青陵大学大学院 教授 佐藤 享 先生

〈第2分科会・適応指導教室〉

アドバイザー 新潟大学大学院 准教授 田中 恒彦 先生



参加者の方々の声

- ・基調講演の中で「アセスメント」「未来語ダイアログ」「Iメッセージ」など、今後の対応に向けてポイントとなる言葉を知ることができた。
- ・教育支援シートの大切さ。このような研修会前後や相談機関にお世話になる際に急いで作ることが多いのですが、コツコツ作っていくことが大切だと実感しました。
- ・「誰のためのケース会議か」という田中先生のお言葉、胸に刺さりました。つい「関係者が楽になるため、安心するためのケース会議」になりがちな自分ですが、大切なことを再度思い出させてもらいました。
- ・自分が一人ぼっちにならないためにできるだけ重なりを作る。一人ぼっちにさせない連携のために一環した支援ができるようにする。本人を中心とした関係図を作っておくと作戦立てに使いやすそう。ただ状況把握したり整理したりする難しさを感じた。(学校・担任には)
- ・「対話」の大切さ。提案ではなくまず困り具合を聞き、1つ1つへの対応について考えることなど日々の教育相談について改めて色々と考えさせられました。
- ・連携そのものはずっと課題としていたことなので興味深かったです。決まった形の用紙を活用し記入の基準などを明確にし全体が同じレベルで把握することが重要であると思いました。担任が周りに相談しやすい雰囲気を作っておくことも大切だと思いました。また、登校を最終目的としない場合においても欠時がある以上高校は、拘らざるを得ないように思います。
- ・第1部では連携のあり方や関わり方について学ぶことができました。第2部では支援シートの活用の仕方や連携図について知ることができ参考になりました。また後半の情報交換では普段話す機会のない学校以外の方と話すことができたのがとても良かった。
- ・自分の専門性を生かしながら教職員やその他関係機関と連携をとれるようにしたい。関係図は子どもの置かれている状況を把握するためのツールとして積極的に活用したい。
- ・講演後の佐藤先生のアドバイスの話を聞くことで、より理解が深まった気がします。良かったです。

## 適応指導部の活動紹介



### 子どもたちの学校復帰や社会的な自立に向けて

適応指導部主任 松島 慎一郎

昨年度までの「生徒指導部」という名称から、今年度より「適応指導部」に変更いたしました。適応指導教室を運営する部として、部の名称が、より活動内容に近づいた形となりました。

当部では、不登校状態にある子どもたちの学校復帰や社会的自立に向けた学習支援や体験活動、教育相談を行っています。主に東区、中央区、西区の子どもたちを受け入れている教育相談センター内の適応指導教室「ぐみの木教室」、北区の「さわやかルーム」、江南区の「そよ風ルーム」、秋葉区の「レインボールーム」、南区の「おおぞら教室」、そして、西蒲区の「スペースレスト」と、それぞれ5つの区にも適応指導教室が開設されています。

センター内にある「ぐみの木教室」では、学習支援を目的とした「チャレンジタイム」を午前中に行い、午後は他者とのかかわる力を育てる「コミュニケーションタイム」を行っています。「チャレンジタイム」では、子ど

も自身が取り組む課題や活動を「自己決定すること」を大切に支援をしています。また、「コミュニケーションタイム」では、「人、もの、ことにかかわる活動」が多く計画され、造形活動、調理、体育、かがく実験、外国語活動、書写、カード・ボードゲーム、外部講師から教えていただく茶道や万代太鼓、けん玉や料理が行われます。さらに、行事的活動も行っています。春の親子ピクニックや、宿泊を伴う夏のチャレンジ・キャンプ、そして、冬の作品展、お別れ会等です。

私たちは、このような活動を通して、子どもや保護者、学校関係者の方の思いや悩み、ニーズに耳を傾け、連携を大切にしながら子どもの成長に資する支援・相談活動を行えるように努めてきました。子どもたちが学校復帰、社会的な自立に向けて、前に踏み出す心のエネルギーや子ども自身の力を高めていくことができるように、今後も一体となって支援・相談活動を進めていきます。

## 夜間「学習・進路相談室」からの声

夜間「学習・進路相談室」主任 金子 裕二

新潟市教育相談センターにある夜間「学習・進路相談室」(以下「夜間」)は、学力不振と進路不安等で悩み、外出しにくい傾向にある不登校生徒(中学生)に対して、学習指導及び進路相談などを実施することにより、生徒の自立と学力の向上や、学校生活への復帰・進路の達成を支援することを目的としています。

そのため、平常時は、水曜日以外の平日4日間、午後5時から8時まで学習指導や進路相談等を行っています。そして、それぞれの生徒に対して、個別指導を行っています。学習に関しては、一人一人の生徒の学力や学習進度などに応じて、できるだけ丁寧に、親身な指導をするように心がけています。

また、進路に関する相談も、本人や保護者と適宜行い、将来に一步踏み出すための支援を行っています。通室を始める生徒の中には、毎回、1日2~3時間学習したいと、張り切って来る生徒も少なくありません。しかし、長期戦でもあるので、はやる気持ちを抑えてもらい、短時間の学習から開始し、徐々に時間と回数を増やしていくようにしています。

また、生徒にとって、「夜間」で学習するのは、想像以上に大きなエネルギーを使うと思います。たとえ短時間であっても、その生徒にとっては大切な学習時間であることをかみしめ、私たちは微力ではありますが、「夜間」に来室する生徒の皆さんのニーズに添っただけの支援を続けていきたいと思っています。



## コラム

### やってみて初めて分かること

私事ですが、健康を考えて6月下旬からフィットネスに通い始めました。最初は、若い人ばかりの中で年寄りの冷や水になりたくないという思いから、なかなか敷居をまたぐことができませんでした。しかし、勇気をふりしぼって体験してみると、意外と楽しんでいる自分を発見することができました。

誰でも初めて体験することには躊躇が伴います。できなかつたらどうしよう、周りから笑われるのではないかと、心が不安で一杯になってしまいます。しかし、いざ決心して実践してみると、思っていたより簡単にできたということがよくあります。

以前勤務していた職場で、学校に行きづらいと感じている子どもたちを対象に宿泊キャンプを行っています。1泊2日や2泊3日のキャンプを計3回、春、秋、冬と続けます。それまで輪の中に入れなかった子どもや頑なに口を閉ざしていた子ども、最初はどうか悩んでいた子どもが、仲間と一緒にゲームをしたり調理をしたりすることによって、回を追うごとに自信に満ちた顔に変わっていきました。帰るときには「私にもできました。」「やってみると意外と楽しかったです。」「友達もできました。」と言いながら、笑顔で帰っていく姿が印象的でした。

何でもやってみないと分からないことがたくさんあります。どんなことにも最初から諦めずに、勇気を出して挑戦する心を大切にしてほしいものです。

(教育相談部 齊川 豊)